

幼少期の読書習慣こそ、「遠きに慮（おもんばか）り」

今回は雑誌、致知に掲載された幼児期の読書の重要性について紹介させていただきます。

『ちょうど 100 年前、世界はスペイン風邪に席卷され、全体で感染者 5 億人～6 億人、死者 2000 万人～5000 万人を記録しました。日本でも感染者約 2300 万人、死者約 38 万人といわれています。各国はその時の体験を今回のコロナ感染症のリスク管理・危機管理に十分生かすことができませんでした。

新聞報道では、新型コロナウイルス感染拡大の影響で休園・休校となった幼児から中学生までの保護者を対象に、ある大学院の准教授が子供の一日の過ごし方について調査したところ、増えた時間は、テレビやビデオ視聴（80%）、インターネット動画視聴（62%）、ゲーム機器利用（52%）で、読書の項目は残念ながらありませんでした。また、全国大学生生活協同組合連合会の最新調査でも、1 日の読書時間がゼロと答えた大学生は 48%と報告されています。

1979 年、アメリカの経済学者エズラ・ボーゲルは日本の高度経済成長の要因を分析した著者『ジャパン・アズ・ナンバーワン』の中で、

「日本の成長基盤をなすものは、その高い学習意欲と読書習慣である」

と述べ、日本の経済的隆盛の主因をその国民の学習意欲と読書習慣にあると喝破しました。凄まじい見識だと思います。

国や企業の存亡に関わるリスク管理と危機管理には、健全な国家観・歴史観・倫理観が必用です。それまで読書をほとんどしてこなかった人が、組織の要職に就いたからといって、急に国家観・歴史観・倫理観が湧き出てくるはずはありません。

『論語』には次の章句があります。

「人にして遠き慮無ければ、必ず近き憂有り」

この意味は、＝目先のことに囚われず、先の先まで思いを巡らせていない者にとっては、必ず近いうちに思いがけない難事が起こるものだ＝という事です。』

ここに述べられているように、幼少期の読書の習慣こそ、将来の「慮り」、安全・安心の原点だと思います。人生百年時代になればなるほど、孔子とエズラ・ボーゲルの言葉は、その重みを増してくるのではないのでしょうか。

日本の将来のために、外出自粛のいまこそ子供に読書習慣を身につけさせる。それにはまず皆様、親自身が読書を楽しむ姿を背中を示すことが大事ではないのでしょうか。是非、親子で読書の時間をしっかりと持っていただきたいものです。

理事長